

「婆ア様々々今夜は頼むに泊めてお呉れ」と話すと「そりや氣の毒だ、泊めてやりたいけれどこの家は鬼が来て泊る家だで泊めれん」と答えた、こゝは山ん中だし他へ行つて泊る家もなし、恐ろしくてもいゝで泊めて呉れと頼むと、

「鬼は今、みんな山へ行つてゐるが今に歸つて來ると大變だで、こゝに隠れ簀と隠れ笠とがあるでこれを着て押入れへ入つて居なと云つた。繼子娘は簀と笠とを着て、押入れへ入つて、黙つてゐると、やがて向ふの方から賑やかに何やらでかい足音がして何かガヤ／＼喋べりながら大勢の赤鬼や青鬼がやつて來た。

ガラリと戸を開けて入つて來て、ドヤ／＼と圍爐裏ばたへ登つて焚火に臀や腹をあぶつてゐたが、

「何だか人臭いぞ、どうも人臭ひ、婆々誰か今夜は人が來りやせんか」と云ひながらそこらを探し始めた。

「誰も人なんか來る譯はない、そりやお前達の氣のせいだ」と婆ア様は答えて知らぬ氣に木綿糸をよつてゐる。

「どうもこの押入れの中が人臭い」と云つてガラリツと開けた、中の娘はハツと思つたが、丁

度隠れ簀と笠を持つてゐたので鬼に見附からなんだ。

鬼たちは盛んに探しながら不審がつてゐるうちに、何處か遠い所で一番鶏の啼く聲が聞えて來た。

「オヤオヤ、人臭え人臭えと探しとる間に鶏が啼いたぞ、一寸寝ろ／＼」

と寢床へ潜りこんで、暫く高駈で寢たかと思ふと、夜の明け切らぬ間にまた揃つて山の奥の方へ行つた。

あぶない所で命を拾つた娘はと簀笠とを着た儘で山から家へ戻つて來た。

ところが世にも珍らしい姿隠しの隠れ簀とて思はぬ貰ひ物に、何やかと重寶な簀と笠とであつた。

この事が早くもお殿様の耳に入り「そんな珍らしい寶を持つてゐる娘をこれへ呼べ」との仰せがあつて、やがて殿様の前へ呼ばれた娘は、隠れ簀と笠とを被つて姿を人に見せぬ様にして見せた。

其寶を殿へ献上したので大へんお賞めになつてそれから幸福にお城の中で暮らしたといふ話。

馬鹿聲の話

何も知らん馬鹿聲が嫁の里へ呼ばれて行く、第一に行儀だけは習つて行かずと思つて、村の庄屋様の所へ教はりに行くと、庄屋様は「まづ行儀は他の人がする通りにして居れば間違がない」と教えた。

そうだそうだ人のする通りにして居れば良いと思つて妻の里へ行つた。やがてお茶が出て茶菓子にうまい饅頭が澤山に出た。誰かどういふ風にして食ふかと注意して見てみると、一諸にゐる子供が、お手玉で曲を取つては饅頭を食つたので聲様も庄屋の云つたのは茲だと計り、曲をとつては饅頭を食ひ、また取り損ねてはまん十を食つた。

晩になると夕食に素麵が出た。これもどうやつて食ふんづらと見てゐると其家の飼猫が出て来て一寸爪を掛けて取ると猫の耳に引懸り、それを漸く取外して口へ食つた、そこでお給仕の前で指で耳に素麵を懸けては猫の様に外して食つた。

さて愈々寝る事になつて、家の衆は大切な娘の嫁いだ聲様が風を引いてはならんと、ぐる／＼

と屏風を立廻して中へ床をとつて呉れた。が夜中に蒲團から太い脚を出して踏張つたので屏風を蹴つて、頭の上へ屏風が倒れて来た。

聲殿は、こりやてつきり壁がこけて来たんづらと思つて両手で支えたまゝ、夜が明けるまで寝れなかつた。

散々御馳走になつて歸る時に家人が「また来て呉れ」といふと「曲饅頭、耳かけ素麵、夜寝ず引つつり壁が無けにや時々来やす」と云つた。

其ノ二

ある所で馬鹿な息子があつた。時に嫁の家に建前普請がある、呼ばれたので家を出がけに、母さまが氣を利かして、これこれお前先方へ行つたらな新しいこれは美事な御普請でと賞めて、そこで一ツ戸か何かに節穴でもあつたら、皆様、惜しい所に穴があるがこれは秋葉様のお札でも貼りなんしよ、とでも謂へと呉々教えてやつた。

女房の里へ行くと普請が立派に出来てゐる「これは美事な普請だが惜しい所に節の穴がある様

だ、こゝへは秋葉様の札でもお貼りなんよ」と云つた。

「そりや何故だ」と聞くと、

「穴閉ぎにもなるし第一火の用愼になる」といふと、馬鹿どころか仲々利巧な氣の利いた鞆殿だと賞めた。

また間もなく近所の飼馬が死んだので御見舞に行きがけにまた、母親が口上を教えた。

「こちらでは大切な馬が落ちて死んでお氣の毒様な」と云つて馬の片脚を持上げ「あゝ立派な肉附だつたが勿体ない」と悔みを述べると教えた、其通り先方でいふと、仲々感心な、どうして馬鹿どころでない利巧もんだと賞められた。

そこで息子は、ハ、ア、御見舞に行つたら万事をこんな調子で行きやいゝんだと合點した。

そのうちに親類の婆さんが死んだ、また御見舞に行きがけに母親が口上を教え様とすると「何もかも知つとる知つとる」と云つて行つちまつた。

さて親戚へ行つてみると大勢の人が集まつてゐるので、こゝごとばかり両手を突いて御見舞の言葉を申しあげて、手を伸ばし、死んだ婆さんを撫で、

「これは美事な肉附だが勿体ない事をしました」と云ひ、今度は片脚を引張りあげて覗いて見

て、

「惜しい所に穴があるので秋葉様のお札をこゝへお貼りなんしよ」と云つたので、成程矢ツ張り馬鹿は馬鹿だわいと皆の衆が笑つた。

其ノ三

馬鹿な鞆が嫁の里へお客に呼ばれて行くときに母親が色々と行儀を教えた。まづ御飯が濟んだら直ぐにお湯を呉れるで其時に「どうか澤庵を少々」といふと澤庵が出る、その時は澤庵をお湯の中へ入れお椀のふちを結構に廻しながら洗つてから、お湯と一諸に澤庵を食べるものだとか細かく注意してやつた。

「嫁の里へ行く」と教つた通りにやつて御馳走になつた、其後でお湯に入りなといふので、早速に湯殿へ行つて風呂に入った。母が教えて呉れた「お湯と澤庵はこゝだナ」と思つて風呂の中で大聲になつて、「どうか澤庵を一本おくれ」と呼ぶと、家の衆が太い澤庵を持つて來て呉れた。家の衆は風呂で澤庵はどうするかと見てゐると、それで風呂桶のふちをぐるぐると洗つて、その後

でポリポリ食べてしまつて頂戴いたしましたと云つて風呂から上つて来た。

上洛と下洛

昔ある物持ちの家の息子、少々馬鹿で何事も知らん、こんな事では世の中へ出るに事が缺ける暫く京大坂の方へ旅にでも行つて色々修業して来いと云はれその積りで出掛けた。

宿屋へ泊ると宿の番頭が来て、へエお客様はこれから上洛なさいますか、下洛なさいますか、といふ、一体その上洛だ下洛ちゆうは何だと聞くと、

「上洛とは都へ登ることと都から戻るのは下洛だ」と云つた。なる程、登る事を上洛といふのだナと覚えこんだ。

程なく宿の臺所の方で「昨夜の残りを猫にやつたか」と女中に話しとる、昨夜の残りつて何づらと思つて聞くと、何でもない、魚の頭だと云つた。成程「頭の事を昨夜の残り」といふのだな成程親父さが云つた通り、旅へ来ると色々な新しい言葉が解つていいとよろこんだ。

すると間もなく宿の帳場で番頭が算盤で何かパチパチ弾いてゐる「そりや何をするんでい」と

尋ねると「いま二一天作ノ五をやるよとこたといふ、一体二一天作ノ五たあ何だ、とまた聞くと割る事だと云つた。ハ、ア何でも割る事が二一天作ノ五かと合點した。

なる程上方へ来ると色々な事を覚えるわいと我ながら感心してまた次の宿屋へ泊つた。すると亭主がこのお客には朱膳朱椀でお上げな、と云つた。朱膳朱椀たあ何づらと思つてゐると、眞赤な膳椀で御飯が出た。「ハ、ア眞赤な事を朱膳朱椀」といふのか。

また次の日に街道を行くと向ふから石を四五人で「ヤートセヤートセ」と呼びながら擔いで来る。ハ、アこれも上方では石の事をセートセといふんだな……またく宿場の家毎に巡禮が、「釋迦のハイ」をと云つて物を貰つてゐる、人から物を貰ふのを「釋迦の灰」といふのだ、と獨り合點で覚えこんだ。

やがて旅から歸つて来ると親父は「長々御苦勞だつた、丁度家のうまい柿が熟したで採つてやろ」と柿の木へ登つたが足踏み外して墜ちた、下の石に頭を打ちつけ大騒ぎになつた。

息子は一目散に村のお醫者へ馳せつけて、新しい覺えたての言葉を使ふのは此時だとばかり。「家の親爺が柿の木へ上洛し忽ち下洛し、昨夜の残りをヤートセに打ちつけ二一天作の五で、朱膳朱椀が流れ出したで早く釋迦の灰」と早口に申立てた。

醫者は聞いて何の事やら薩張り判らん、何でも親爺が柿の木だといふだけ判る、どうかしたづらと思つて来て見ると、親爺が落ちて血だらけになつて唸つてゐた。

切明の庄屋

どこの芝居を見ても村の庄屋様といふものは、鼻の下が青くて薄ノロに出来てゐる、安曇の郡美麻村の切明の庄屋が用事あつて松本へ行つた。

宿へ泊つたが洗足に宿から少々離れた井戸へ行つて来るに宿屋を忘れてはならんと用心深く、下駄を片手に宿を出がけに門の紺の暖簾にベツと唾を引かけて濡らして目印にして出た。

足洗ひが濟んでいざ宿屋をと思つて来てみたが、さあ判らん。この家か彼の宿かと紺の暖簾のある家は片端から、唾液の玉が附いてゐる筈だがと探し出したが一向に判らん、それこつちの町内、あつちの町内と松本中を探した、果は大きな聲で、

「切明の庄屋、足洗ひ参つた紺の暖簾に玉唾」とどでかい聲で呼んで廻つた相だ。

この切明の庄屋へある日、代官所からお觸れが来た哇呼（くろち）検分の爲に出張に及ぶとあ

る。

黒ぢたあ何の事だ、黒ぢたあ昔から眞黒い髻のことだ、それじや村中の黒い髻を調べるんづらと、村のうちから黒髻を選んで、ズラリと當日は役人の前へ列べて見せたといふ昔話が残つてゐる。

また或年に切明へ今度替られた新しいお代官様が来るといふ。始めてだから歡待のお客を庄屋が家で開く事に村中で決つた。ところが村の百姓たち「俺は行儀も何も知らんし、そんな傑い人の前で困つちまふ、どうすりやいゝ」と庄屋の所へ集つて聞くので、庄屋様は、何々万事は俺の所作の通りを眞似て居りや間違ひないと云つたので百姓たちもやつと安心してこの歡迎席へ出る事になつた。

やがて當日となると二本指した立派なお代官様と下役人がズラリと正座へ直ると庄屋、組頭、長百姓、土百姓の席順で並んだ。

晝間打合せの通り、俺は庄屋様のやる通りにして居れば間違ひないといふので一同の者は庄屋が箸を執れば箸を執る、飯を一口食へば飯を一口食ふ、汁をチュウーと吸へば汁を吸ふ。

鼻汁をすゝればツウンと皆が一齊に鼻汁をすゝる、いやはや可笑しな事になつて、其内に庄屋

が箸で挟んだ里芋がコロ／＼と畳の上へ轉がり落ちた。

すると大勢の者が其通りに里芋をコロ／＼と轉がした、庄屋は慌て、芋を拾はうと出て行くと股から禪が外れて後へ引すつて里芋を追掛けた。外の者もその通りにするものだと思つて、禪を垂らして、座敷中を芋を拾ひ格構よく這ひ摺り廻つた。

庄屋様の智恵

お殿様より差遣のお役人が村の庄屋へお泊りになつた。何しろ山ん中の事だから庄屋も一向何も存ぜん、お役人がお座敷へ通つて何處も同じ慣ひだから落附きにお湯かお茶でもと思つてゐたが、一向に物をわきまへん山家の庄屋だ、そこで役人が自ら、

「これこれ庄屋、湯か茶を出せ」と仰言られた。

そこで臺所の方で庄屋始め庄屋代、組頭、長百姓まで寄つて圓い眼をして「今お役人がユカチャを出せ」と云つたが、ユカチャつて何の事づらと寄々相談をした。どうも判らん判らんと云つてゐると一人が、あゝわかつたぞ、村のお祭りにやるユカチャ踊りに違ひない、おゝいゝ所へ氣

がついた、早速に出せと、一人がねじ鉢巻に竹棒を擔いで、尻端折つて、ユカチャー ユカチャ／＼とお役人の居る座敷の庭先で踊つて見せた。

その晩は御馳走に何分にも山家の事だで格別なものがない、山の名物の蕎麥を出した。するとお役人が「葱を出せ」と云つた。またまたわからん「ネギ」つて何だ、あゝそうだ禰宜様の事だ早く飛んで行つて禰宜を呼んで来い。それから、お役人が蕎麥を召上つてゐる所へ、禰宜が白装束でまかり出した。

お役人もおどろいた、それから夜も大分に更けて來た模様だ、「これ／＼庄屋、早く床をとつて呉れ」と云つた。

ところがまた／＼相談が始まつた。早速に納屋から大きな掛失槌や斧鉞、鋸を擔ぎ出して座敷の床の間をドンドンガラガラとブチ壊して取去つて庄屋が「お役人様、仰せの通り床を取りました」と申上げた。

お役人も愈々もつてブツ魂げた。愈々寝る段になつて「明朝は庭先へ手洗水を廻せ」と云つてお寝みになられた。また台所で鳩首して圓い眼を見張つて相談だ。

「今度こそは何だか解らん、勘考が附かん」

「こりやお寺の和尚様に伺つて来るがいゝ」と其晩夜更けに寺の門を叩いて譯を話して勘考を願つた。

坊主頭をひねくつてあれこれと思案したがやがてはたと膝を打つて、解つた解つた。

「チョウツとは長い頭と書く、これは朝の縁起に長い頭を庭先で廻せといふ事だ」との和尚様の解釋だ。

それでは村中で一番に長い頭は誰づらと村の片ツ端から調べていつたが、新田の太郎兵衛が一番に頭が長い、あいつに明朝は廻させるとその晩の内に交渉が出来た。

一夜が明けると庭先に罷り出て両手をつかえ待つてゐる新田の太郎兵衛の頭は、流石は村一番だけあつてヒヨロ長い福祿神あたま、やがて障子がサラリと開いて、廊下へ出た、こゝぞとばかり太郎兵衛は長い頭を振り／＼グルグル／＼廻した。

お役人出て見たが昨夜あれ程云つといた手洗水ちやうづが廻つて来て居らん「コラコラ早く手洗水を廻さんか」

太郎兵衛先刻より一生懸命に頭を廻してゐる最中だ、

「へエ唯今御覽の通り一生懸命に廻してゐます……」

「コラ早く廻せ」と大きな聲で呼ぶ、裏から庄屋がもつと頭を早く廻せ廻せと焦る、グルグル早く廻すうちに到々太郎兵衛も目を廻してブツ倒れてしまった。

火種の話

これは昔の昔の話である、その頃の習慣として「火種」を絶さぬといふ事が台所を預る主婦の大切な務めであつた、大きな爐に年中埋め火して爐の種にして、毎朝それを火種にして飯や汁を煮る元にした。それで夜更けて寝る時に、炭を継ぎ足しては爐に灰を掛けて置いた、所謂埋火とはこれであつて、この習慣は、家によると代々幾十年も爐に火種を絶さぬといふ物固いしきたりの家もあつた。

ある所に未だ嫁つて来たばかりの若嫁が姑さまから「火種を絶さぬ様に」と時々注意をされてゐたが年の暮の忙しさから、遂に継ぎ足す炭を忘れて大切な火種が絶えて、爐が冷たい、灰となつてしまった。

「これはどうすればいゝのか」と思案に暮れて晦日の夜更けに獨り胸を痛めた。明くれば愈々

芽出度い元旦なのに、早々から火種がバツタリ消えて無いなど縁起でもない、姑様にあれ程に云はれたのにどんなに叱られるか、これは誰かに火種を内證で借りるより他に手がないと、家の門へ出て人の通るのを待った、外は深い雪ばかり、白く積んだ雪の晦日の夜更けに何で人が通るものか、

嫁は暫く佇んでると向ふの雪の路を遙かにチラリホラリと松明らしい火が見える、松明が段々こちらへ近附いて来るので待つてゐると愈々家の前まで来たので見ると、白装束に棺を擔いだ葬ひの行列だった、嫁は思案したが、他に火種を借りる術はなし思ひ切つて、

「モシ／＼恐れ入りますが、妾は爐の火種が消えて困つてゐる處でありますが一ツ其松明の火をお借し下され」と頼みこんだ、葬ひの列は暫く立止つて何かヒソ／＼話合つてゐたが、

「それはお困りとあれば松明の火をお貸し申すが、次い手にこの棺桶もしばらく置いてもらはう」

と云つたかと思ふと早くも棺を擔いで門口からどん／＼座敷の眞ん中へ持ちこんで、棺を置いたまゝ何處ともなく行つてしまつた。

火種は出来たが棺を座敷に置いて行かれたのはまた心配だった、その内に東の空が白みかゝり

愈々元日の朝となつた。

貰つた火種のお蔭で芽出度く元旦を迎え、臺所で家内揃つて話してゐると、突然に奥の座敷でドンガラガラガランと大きな物音がした、家人は驚いて行つて見ると、葬ひの棺桶が壊れて、座敷中に一杯に黄金小判が散つてゐた。(北安曇 北小谷)

嘘つきの話

どこの村へ行つても嘘吐き名人の一人や二人居ない所はない。ある村にこれもその一人で生涯嘘はつか云ひ通して来た名人の域に達した老人が愈々死に際に親類や近所の組合の人達が枕元に大勢集つて来て息を引とる間に遺言を残した。

「儂は今まで皆のお世話になつて長生をしたが愈々お暇だ、お禮に何かやらすと思つてゐたが何も無い、實は日頃溜めといた小金が壺へ入れて庭の柿の木の元へ埋めてあるので、皆で分けて呉れ」と云ふ。

葬ひも済んで愈々遺言の片身分けた、皆で柿の木の元を掘つて見ると成程一つの古い壺が出た

成程あの爺さんも嘘ばつつか吐いとつたが死際には殊勝なものよと感心しながら壺を座敷に持ちこんで、みんな集つて壺のふたを取ると、中から金は一文もなく、一枚の紙が出て来た、何やら字が書いてある、よく見ると「これで嘘の吐き終ひ」と書いてあつた。

嘘つき小僧

ある家の雇人の小僧、世にも稀な嘘つきの名人で、朝から晩まで嘘ばかり云つてゐる、この日も裏の山へ行き生米を嚙んでそこら一杯に吐き散らして置いて、家へ戻り「旦那様、いま裏山へ鳩が何十羽も来てゐます」と云へば旦那は慌て、鐵砲小脇に驅出した、一諸に行つた小僧「あれあのあたりで」と教え、その儘一足先へ家へ飛んで戻り「奥様々々大變だ、旦那は裏山で鳩を打つとて崖から落ちて死になすつた、早く髪の毛を切つて佛壇にあげ念佛でも申して」と嘘こきの涙を出して申せば、お神さん本氣に黒髪を根元からふつつり切つてお念佛を申してゐる所へ主人が戻つて来た。

「こりやどうした事だ」山に鳩が居るとたまされた。妾も夫が死んだと欺された。到々主人も

怒つて小僧を捕え依に詰めて、千曲川へ流さすと擔いで二三町行くと依の中で小僧泣き出した。

「何を泣く、泣く分が何處にある」

「僕は嘘はつかり吐いて悪かつた、流されて死ぬ前に一生一度の願がある」主人は本氣らしいのに依をトして聞くと「僕の寝間の床下に、金を澤山溜めた壺を置きました、此世の別れに金の金を旦那様と奥様に差上げます、残りの少々を親元に届けて」といふので主人は家へ馳せ戻つた。

小僧は依の中で「依薬種は目の養生」と大きな聲で怒鳴つてゐると其處へ目の悪い人が来てその譚を聞く、それじや「俺と入替つて依の中へ入つてゐると目が癒る」と解いてもらつて其人と入替つて逃げて行つた。

家へ戻つた主人、床下をめくつて見ると糞小便が一杯、こりやまた欺されたかとかんかんになつて戻つて来た。

「この野郎まだ人を欺しやがる」と依を擔いで河ばたへ行く、中の人には驚いて「わしは目が悪いで入つて居るだに人違ひだ。

「何を吐く、こん度は其手は食はぬぞ」と依を河の中へ投げこんだ。

(上田附近)

團子とウントコシヨ

嬢様の里へお客に呼ばれて行つた亭主殿が、やがて拵えて呉れた團子のうまさ加減、何たらまあうまいもんづらと澤山に食べた。

「こりや一体何ちゆう物だ」と家の衆に聞くと「こりや團子ちゆう物だ」「成程、始めて聞く名前だ、忘れちやいかん、家へ歸つたら拵えて貰はず、第一に名を忘れん様にと歸る道中をダンゴ團子と繰返しながら戻つて来た、すると途中に溝ツ川があつたのでウントコシヨと聲を掛けて股いだ、その拍子に今まで團子々々と呼びながら来たのが、ウントコシヨに變つちまつた。それから道々忘れん様にと、ウントコシヨウントコシヨを繰返しながら漸く家へ戻つて来た。

「おい嬢や、お前の家へ行つたら、ウントコシヨちゆううまいものを拵えて呉れたが、今度は家でもあのウントコシヨを拵えて食はしよう」と云つた。

女房は、ウントコシヨとは始めて聞くので「そりや一体どんな物だつた」と訊ねると、こりやあのウントコシヨを知らんちゆう事があるもんか。ウントコシヨはウントコシヨだ、そのウント

コシヨを早く拵えろ……といふ、妾しやそんなウントコシヨは一寸も知らんといふと到々怒つた亭主は傍の摺古木で嬢の頭をボカンと叩いた、見る／＼間に嬢の頭へ大きな瘤が出来た。

泣きながら嬢は「何たら非道いこんな團子のやうな瘤を拵えて」としがみ附くとそれを聞いて「ハア……其團子々々ちゆうものだつた」と云つた。

粗そう惣兵衛

ある所に粗そう惣兵衛といふ、とても粗そつかしい男があつた。ある年の秋、ひとつ權現様へお参りに行つて来ずと思つて嬢アに、明日は權現様へ行つて来るで今夜のうちに辨當を拵えて枕元へ置いて呉りよと云つて置いて寝ちまつた。

明くる朝、まだ暗いうちに起きた惣兵衛、枕元にある嬢が拵えて呉れた辨當を、よし来たと風呂敷に包んで首ツ玉に縛り付けて草鞋をはいて出掛けた。

權現様のお山はお九日でお詣りが澤山な人だ、惣兵衛もいゝ氣持になつて權現様へお参りしたまづお賽錢をあげずと思つて、財布の中から錢を一文出して、お賽錢箱へポーンと抛つたら中で

ガチャ／＼と大きな音がした、気が附いてみると、一文の錢の方を片手に握つて財布を間違へてお賽錢箱へ抛つてしまつたのだつた。

あゝ失敗つた、糞いまく／＼しいと惣兵衛は我ながら腹を立てたがまづまづ仕方がないで、お晝飯でも食べてと、山の見晴しのいゝ石の上へ腰を掛けて、首ツ玉の辨當を下して解いて見ると、今朝出がけに暗いので手觸りで辨當箱と思つて包んだのは、自分の箱枕だつた、そしておまけに風呂敷と思つたのは脱いどいた婢アの腰巻だつた。

惣兵衛は怒つてポーンと谷底へそれを抛つてしまつたが、業がわいて業がわいて仕方がない。急いで山から降りて、家の方へ向いて來たが腹が減つてペコペコになつたので一軒の餅屋へ寄つて、一つ幾らだ、何一文に一つ、それじやこれをと云つて一文置いて一番太い奴を掴んで飛出した、そして暫く行つてバクリと食付くとカチリと固い音がして前齒が幾らか缺けた、よく見ると焼物で出來た餅の大きな見本だつた。

愈々業をわかした惣兵衛もやつと家まで戻つて來た、吾家が入るが早いか婢アの頭を二ツ三ツウンとぶん撲つた「痛ツ、アレ惣兵衛サ何をするの」といふ聲が變つとるので、よくよく見ればお隣りの家へ間違つて入つて、隣家のお神さまを叩いたのだ。

失敗つたと其處を飛出した。俄かに雷様がゴロゴロとすごく鳴り出した、家へ飛込んだ惣兵衛はまた外へ出て、大聲で、「オーイ大變だ俺がウチの婢アが雷様に首を抜かれたで早く來て呉りようヨ」と騒いだ。そりや大事だ首を抜かれたたあえらい事だと近所隣り大勢が集つて、家へ入つてよく見ると婢アは雷が嫌ひなので、布圍へ首だけ突込んで震へて寝て居つたのだつた。こ衛を見て皆の衆は成程、粗そう惣兵衛に違ひない、と云つて笑ひながら歸つて行つた。

屁ひり嫁

むかしある所に美しい娘だが何しろ屁を放るので嫁に貰ひ手が少ない、ある家で屁くらいい何だあんな器良の良い娘なら嫁に貰はずと云つて、忤の嫁に貰つた。ところがねつから幾日経つても屁の音がせん、その内に嫁の顔色が黄色く何だか變な顔色になつて消れて、イヤに元氣がない。

姑様は大層に心配して、お前この頃どうした顔色が悪いが、と聞くと嫁は、お恥しい話だが妾は屁の出るのを我慢しとる内にこんなになつた。といふ、おゝそうか屁位は何でもない、遠慮は要らん幾らでも放るがよい、と姑様が云つた。それでは姑様御免なんしよと臀を捲くつたと思ふと今迄溜めといた屁をブウブウ／＼と放り始めた、段々に屁勢が強くなつて、とう／＼傍

に居つた姑様を天井へへで吹きあげてしまった。下からへで吹くので落ちてこん、目が廻りそうになつて姑様は、ヤア嫁よこゝらでへの口を止めよ、と呼ばつた、嫁は仕方なしに未だ出たがるへの口を止める。天井からドサリと墜ちて姑様は氣絶してしまつた。

屁の名人

ある所にへの名人が居た、あらゆるへ。藝に通じた評判を聞いて、ある人が旁々招いてへ。藝を聞くことになつた。まづへの種類を片端から、鶴の巢籠り、蛇の笹渡り、孫呼り、梯子段、等々其を自由にプウプウ放り分けて聞かせたり見せたりした。

まだ極意の「薙刀」といふへがあるが、これは滅多に放らんといふと、主人がそれを放れといふ、いやこれは極意だで矢たらに放れぬといふ。何でも放つて見せろといふ強い注文なので、名人も、それでは御所望とあれば放つて進ぜると座敷の真中に立ちはだかつて。

「ブツ……これが薙刀の石突で次は」

「ブ……ブ……長いのが薙刀の柄」

「バアツ……これが鏝で、次は愈々本味を鞘拂ひする」

「ブツリズバリ……」と鞘拂して放つたへの音と共に中の抜味は墨の上に黄金色した鼻持ちならぬ糞を長々と横たえて「これが極意の薙刀へでございます」と云つた。

蛇智の話

昔々或所に一人の百姓が田甫へ行くと、一匹の蛙が蛇に吞まれ掛り、ギュー／＼と悲し氣な聲を立て、泣いてゐた、其人は氣の毒に思つて「これこれ蛇よ可哀相だで蛙を放してやれ、助けるなら儂の娘を嫁にやるで」と云聞かせると、蛇は蛙を放して背きながら草の中へ這入つて行つた。翌朝になると立派な若者が門口に来て「昨日田甫で約束した蛇だが今日は娘を貰ひにやつて来た」と云つてゐる、父親は心配して昨日は何氣なく、蛙を救いたいばかりに云つたものゝ、大切な娘を今更蛇にやる譯にもゆかず奥の部屋で蒼くなつて心配してゐると、其家の三人娘のうち末の娘が、

「心配なさるな、妾が嫁に行つてあげず」と決心した「持物に木綿針を千本を下され」といふ

ので千本の針を持たせた、門に待つ若者と一語に連立つて山の方へ行つた。

娘は若者に連れられて山奥へ行くと、谷底に深い蒼い淵があつて、其處まで来ると、

「此處が儂の家だ」と先へ入つて行く、娘は後より従いて行く振りをして、蛇掣の後姿へサツと千本の針を振懸ると軀一杯に針が突刺つた。急に恐ろしい唸り聲と變つたので、娘は其儘に家へ逃れて戻つた。

眞似地藏

むかしある爺さんが山へ仕事に行つた。すると裏の山から木の枝を傳はつて大勢の猿が、キヤツ／＼と現れ出て来た、こりや斯うしてゐて悪戯されちや困るぞと何處かへ隠れようとしたが物蔭もない、突差の思案で河原の石の上へ突立つて、片手を胸に、片方を高くお地藏様の眞似をして凝と動かすにゐると、やがてそれを見つけた一匹の猿が親方猿に注進すると、一群傳え聞いてこんな山の谷底にお地藏様がお出で遊ばしたといふんで、それから山の栗の實や木の實、山芋まで澤山に掘つたり採つたりして、生きたお地藏様の前へ来ては跪いて、栗などの供へ物をしては

拜んでゐる、次から次へと大勢の猿が物珍らし氣に交る交る山から色々な物を採つて来て供へるので忽ち、生き地藏の前は供物で山を造つた。

拜んでゐた猿も其内に木の枝を傳はつて山の上の方へ行つたので、やつと元に還つたお爺さん可笑しいやら珍らしいやら思はぬ出来事と供物に驚いたがどうせ俺に供えて呉れたんだと、背負板に一杯たねてウントコ／＼家へ戻つて婆に見せて、そいつあ良かったと大喜び。

それを聞いた近所の爺さん、俺も供物を貰つて来すと翌日にその山へ行つて河原の石へ登つて待つてゐると、また大勢の猿の群がやつて来た、そして

「有難いお地藏様がこんな山蔭の岩の上じや勿体ないで、川向ふの日常りのいゝ處へお移し申せ」

と相談が決つて、ヨイショ／＼と猿が地藏様を擔ぎ出した。眞似地藏の爺さん驚いたが黙つて其儘になつてゐると谷川を擔いで、

「深いぞ／＼轉ぶなころぶな……」とキヤツ／＼と涉つて行く、手車に載つた地藏のふんぐり擧丸が猿たちの顔や手にヌルリと觸つた、すると猿たちは面白くなつて、この地藏にや軟かい擧丸があるぞ、と云つた、何何、ふぐりがある、そいつあ大切だで河へ落しちやならんと一匹の猿がいふ

それから猿たちは一諸に聲を揃えて、

「さゝるの罌丸落すとも、地藏罌丸落すなよ」

と歌ひながら澄んだ水の谷川を涉つて行く。生地藏の爺さんも遂に可笑しさを堪え切れず「ワハツハ………」と笑つちまつた。すると猿共は、

「それ地藏様が笑つたぞ」と吃驚して、地藏をザンプと谷川へ投げ轉したまゝ、山の奥の方へ逃げて行ちまつた。

長い名前

昔々、二人の息子のある母が繼子の兄には長い名前を付けて、人に呼び悪くして世の中に出さぬ様にして、實子を出世させようとした。それで兄の名前を、

「扇拍子を丁と打つて一丁ぎりに二丁ぎり、丁に丁に丁ろくに、丁太郎櫃に丁櫃に、あの山にこの山に、あゝ申すこう申す、ひちくきすんぎり黙庵に、天目々々の黙僧坊、伊賀の平左衛門に加賀の源藏主、源七源八源平六、とつべない五郎、豆腐のおん坊食辛坊、瓜のおん坊とうがん坊

刀の鑓の小左衛門、鳥のとつさか藤三郎」

と云ふ途方もない長い名であつた。ところがこの長名がかえつて有名になつて時の殿様に見出されて出世したといふ話。

これに類似した長い名に「まにまにまゝに、しゆつくりしやつくりとつくりもつくりだ、あるまいかの万太郎」

といふ話がある、其他に北安曇地方に「てきくおん坊草林坊、背高入道播磨の別當、茶碗茶臼にひきんのへこ助」といふ名前を附けた話がある。

長い話

昔々ある殿様が話好きで毎日家來達を交る／＼呼んで話をさせたけれど、どれも話が短かくて面白くない、もつと長い話を知つた者を呼んで来いといふ命令だ、すると或日のこと長い話を識つるといふ者を連れて来た、この男は殿様の前でこんな話を始めた。

「ある所に大きな米藏が幾棟も並んでゐた、そこへ一匹の蟻ゴが潜り込んで米をくわえて運び

信濃を代表する著名な昔話は、姨捨山の話に、物臭太郎の譚である、二話共に周知のこととして本集には省文したが、古くよりこれらの話を汎く傳承したのに、二つの系統があつたやうである。

一は口頭傳承に依る文字無き里人大衆が、耳より耳へと、老嫗より孫子供達へと次より次へ傳承されて鑑賞持續されて來た。第二には文字を持つ詞人文人が之を里人より拾ひ上げ文學として修飾して鑑賞し來つた。

この二つの昔話管掌の跡は令尙明かに其を認め得る事が出来る、同じ姨捨山の話も信州各地の里人に尋ねれば、親捨山の話と云ふ方が多い、そして灰の繩なひと法螺貝に木綿糸を通すなどの難題を老人の智恵で解いて、領主命令の六十歳の谷こかしの親捨習慣が廢止された。と云ふのが文字なき里人の傳承する親捨山譚である。第二の詞人は採りあげて大和物語に納め、姨を捨てた山の上に照る月を眺めて一首の和歌を詠じてゐる、その時の山が更科の姨捨山である、と文字によつて傳えてゐる。

就中安曇の「物臭太郎」の昔話などは、土地の人が口頭傳承によつて持續して來たと云ふよりも昔の昔に、都の文人が爲すところの「物臭太郎物語」の名文が有力な昔話として再び元の郷土へ再植された形である。

この二種の昔話管掌者には思藻上にも理解力にも甚だしい階段があつたかは知れぬが、古き譚を古き話の形を愛する心持の有無に變りなかつたであらうと思はれる。現在も尙この二つの鑑賞者によつて持續されてゆくのであらうが、否もつとも今は第一の昔話傳承者が次第に曉の星の如く其數を減しつゝあるのはどうすればよいか。

かゝる時に其を惜しむ人々が、口頭傳承の昔話を拾ひ蒐めて文字に残したものが信濃の各地に出版された。北佐久の口碑傳説、小縣民譚集、北安曇の口碑傳説、下伊那の昔話、等がそれである。其他縣下の各郡史や、町村史の一部が僅かにこの部門を割愛して居るにすぎない。

本書は信濃昔話集の名を冠て上梓せられると雖も、これを以て全信州昔話を悉く網羅したとは勿論謂ひ得ない、僅々二百餘の冊子に就き分類した各項目に基き、一話一話これと同類の代表的な話を掲げて参考とするに止めた。

狐狸の話、動物説話、小鳥の前生説、また爐邊譚中の各話など、一見實に他愛もないような話に思はれるが、これを味ふに、一話一話そこに何等かの寓意に滿された一種の目的を帯て居るのを發見する事が出来る。昔話の發生には其の説話が、恰も現在の小學校修身の教材訓話の如くに一つの約束のもとに發生してゐた事が思はれる。

信州の昔話には東北地方の遠野物語や聽耳草紙に現れてゐるやうな感じは到底出るものでない。そして信濃の昔話は話者自身の作爲の跡が窺はれると云ふが、其点は私には解らない。東北地方と信濃とは文化の程度も相違がある、吾々信州の文化は或は東北の昔話ほどに其説話の原型を其型の儘に止めて置き得なかつたのであらう。遠野や聽耳の話に及ばずとも信州には信州の昔話がある、山岳の話、動物の話、鳥や虫の話、さては冬の雪深い信濃の炬燵や爐邊で語る昔話に佐久は佐久、長野附近、松本筑摩、伊那は伊那らしい方言と語り方によつて、山國らしい話題が耳をよろこばして呉れるのだ。

うれしいのは故郷の昔話である、幼き日の遠い思出を包む昔々の噺は本集蒐録以外に、まだ夥しく埋れて居る事と思ふ。諸賢が住んで居られる村や町の老嫗にでも尋ねたなら、もつと燦然と輝くやうな珍らしい話があるかも知れない諸賢がもし採集しやうとするに、少しでも参考にならばと次の分類標目を掲げて参考とする。

一「親捨山」昔は六十の谷こかすと云つて、親が年寄ると不用なものとして山へ捨てよとの殿様の命令に服し兼ね、一旦捨てた親を家に背負歸り、灰の繩なひ、法螺貝に糸を通す等の難題を解き、老人を捨てる慣しが廢止された話。

- 二「物臭太郎」安曇のものぐさ太郎の徹底した、づくなし話の他にこれと同型に属する、呆れた程のづくなしの話がある。
- 三「一寸法師」椀の舟に箸の權で都へ登つた一寸法師話の他に、爺婆と一諸に暮らす法師の奇談がある、盗賊を走らせたり、草に晝寝して馬の腹の中へ入つたりする話。
- 四「良い爺と悪い爺」この話の型に属するものは幾種もある、花咲爺や舌切雀の他に、鼠の御殿へ握飯に導かれて行く爺と其を真似てみる爺、鳥吞み爺や竹伐り爺は山畑で捕えた小鳥を吸つてチ、ンブヨ／＼をやつて殿様より御褒美を貰ふ爺と髯を切られる慾深爺の話、各郡の地方によつて其時の小鳥が山雀であつたり、四十雀であつたり、又は雉であつたりする。
- 五「聽耳話」動物を救つた御禮に鳥や獸の言葉を聞き分ける事を覚えて色々な幸福を掴む話。
- 六「繼母繼子」本集に納めたお竹お松や赤苺黒苺の話と同型のものが色々な経緯や形式を持つて語られてゐる。栗拾ひ、糠と米、の話や、繼子殺されて埋もられたのを鶏が啼いて告げた話、笛を吹くと我子の死を知る父親など同類型の話は數多い。
- 七「和尚と小僧」お寺の和尚と其小僧との話で本集に納めた話が大概全貌である、機智に富ん

だ小僧の行動や禪宗坊さんの珍問答に關した幾つもの珍談がある。

- 八「嫁と姑」嫁と姑との意見の相違などを織込んだ話、末に一致して仲良くなると云ふ。
- 九「兄弟話」兄弟二人の性格の相違を對照的に取扱つた昔話で素直で正しい道を歩む弟は出世し之と反對な道を歩るいて來た兄は乞食になつて路頭に迷ふ。と云ふ様式の話。
- 一〇「動物女房」危急を救はれた鶴が人間の妻になつて羽毛で機を織つたり、狐其他の動物が人妻となつて色々な事をして恩に報ゆる話、其他に天ノ雀や悪鬼が女房となり蓬や菖蒲を採つて魔除けにする話などある。
- 一一「動物の掣」猿掣蛇掣等が之を代表した昔話である。前者の報恩談に比し、之は怪異に富んだ話で人に魅入る蛇性の淫も含まれた話である。
- 一二「天人女房」計らずも下界へ降りた美しい天女を妻として暮らす男が禁嚴を破つたが爲に天に還つた天女を忘れ得づまた尋ねて天に昇り、また禁斷の天女以外の瓜を摘み貞操觀念の薄い男は大水が出て二人の間に大河の隔てを生じ願つて漸く一年に一度の逢瀬を得ると云ふ話、七夕譚として傳へ語られてゐる。
- 一三「笠地藏」貧しき人が雪や雨に濡れる地藏に笠笠を着せて終りに幸福になる話。

- 一四「歌よみ話」歌をよむ事によつて幸福を掴む話や、單に歌の贈返のみの話、狂歌、猥歌によつて笑話に落す話、之を行ふ人々が色々な階級の人々によつて歌を詠じてゐる。
- 一五「粗そう物兵衛」本集にある話の様な形式で、粗忽者が色々な粗そうを演ずる話。
- 一六「隠れ簀」昔は隠れ簀と云ふ重寶な物があつた、天狗の隠れ簀、鬼の家の隠れ簀、其他であつて自分の姿を人に見らるゝ事がない様な被ひ物があつたら便利だと云ふ想像がこんな話を産んだ。
- 一七「どうもこうもの話」昔諏訪にどうもうと云ふ醫者があり、甲州にこうもうと云ふ醫者があつて、藥の効能の競べ合ひをやつた話。其他、どうもこうもならん話が各地に残されてゐる。
- 一八「馬鹿の話」馬鹿聲、馬鹿息子、が徹底した馬鹿振りを發揮して見せる話が澤山ある、昔話の語られる處二ツや三ツこの話のない所はない。中には實在の人物も登場して來て賑はせる。北安曇地方の「グツの話」など馬鹿話の代表的なものである。
- 一九「古屋の漏り」シ、狼より、古い屋根の雨漏りの方が恐ろしいと語つてゐるのを聞いた狼が個有名詞と間違え「古屋の漏り」と云ふ怪物が此の世に住むと思つた話。

- 二〇「嘘こきの話」どこへ行つても嘘の名人の一人や二人居ない村や町はない、嘘を吐くことに依つて存在が有名になつて居る人がある。その嘘こき逸話が話の領域に入つて嘘の尾や鰭がつくと立派な嘘こき話となつて語り残されてゐる。
- 二一「屁こき話」これも前者に似た名人の領域に達した話で、中には屁藝昂じて屁が人音を發して喋舌ると云ふ途方もない話がある。
- 二二「大力持の話」各地に巨人的な大力持の話がある。北佐久の伍賀草越の荻原次郎右工門、北安曇會染の太兵衛、下伊那尾科の高橋文吾など代表的な力持ちの話である、其他に各村々には神社境内の力石を樂々と肩に擔いで歩いた様な力持ち話がある。
- 二三「狐狸其他獸の譚」狐狸其他の昔話で、こんな話も今の内に聞いて置かぬと次第に消えて無くなつてしまふであらう。
- 二四「鳥、蟲の譚」親の死目に逢はなかつた燕や、其他の鳥虫の前生譚がある、鶺鴒が尾を振るのに暗示を得る話など創世の時代が思はれて面白い。
- 二五「化物怨靈の話」空き家や無住の古寺に毎夜出る化物の生体が埋められた寶物や古金銀小判だつたり、怨靈の現れだつたりする怪異譚。

二六「小話」これは極く短い話で小さな断片的なものや、小さく纏つた笑話、寓話が澤山ある。

分類の標目に就は未だ掲げ足らぬ種類が多くあるであらうが、前掲の標目は大体を列記したものである事を承知して頂き度い。しかし諸賢が住む村の老人が物識りにほたけ楳火くゆる爐邊か雪の深い冬の炬燵で、静かにぼつりぼつりと昔話の糸を手繰つて訪ねてゆく時、語つて呉れるところは高低前掲の標目下に置かるべき話に違ひない。

これを大別して二種とする事を得る、即ち一は大人の語る昔話と、児童に語り聞かせる昔話の二つである、更にこれを類形上に於て分類するならば

一、普通童話、二、動物の説話、三、小話、の三型に型を分ける事が出来る。

昔話の採集に當つては小學校の冬休みなどに際し児童の家庭の老人や母などに聞いた儘を拾ひ集めて、所謂カード式の採集法など實行したら最も手近い手段である。村の昔話集、郡の昔話集は直に實現するであらう。

但、採集の管理者は、成可く話の原型に近いものに心掛けて、前にも述べた話者の作爲を避けて欲しい。理智的なは信州人に鬼門之か多いと謂ふから。

特に附記したいのは、右に掲げた分類標目の他に「星に関する昔話」を知つてゐる人はないであらうか、また「星」の他に「魚」に関する前生譚の如きものもないか、信濃の昔話を調べても星と魚に関する話が尠く殆ど絶無と云つてよい位であつた。星に就ては僅かに「三ツ星譚」で、あの星は父と母とが並んで真中に愛しい子供を入れて擔いで旅をすると云ふ話位いなものであつた。

信濃の高原は本土最高の大屋根である、あの明澄な仰げば仰ぐほど限りなく深い山の國特有な夜の大空に、燦爛ときらめく星と話すには最も接近した位置に住む國人である、きらめく神秘的な「星」の話が幾つか語られてゐてよい筈なのにどうも聴き出すことが出来なかつた。そして魚も同じくであつた。この点は海に接した地方とは異なる事情によるものかも知れない。但し魚や星に對する關心を持つ態度の稀薄なのが我邦の民族性であるとするれば、これは獨り信濃の昔話のみが負ふ可き責任でない事を思ふ。

結言、本集に収録した民話の表現法に就き、讀まれし方は色々思考せらるゝであらう。昔話は其の傳承に要する話振り、語法、話す調子に特色が伴ふものであつて、信濃は南信北信に大別

された上に起伏重疊する山々を境に郡も十六に分ち、各々に異なつた方言と語法、調子を持つた昔話の傳承である。各地方の話者の原語を其儘に敘するが最適の方法であるとは謂へ、限りある紙數に最大限度に話の數を收容したい方針で稿を進めたゆゑ各地方の特色を帯びた耳の文學、傳承文學を的確に表現し得なかつた事は甚だ遺憾に思ひ、他日補筆改訂の機を約束し、この書を讀まれる信濃各地の諸賢に御諒解を願つて擱筆する。

信濃昔話集終

昭和十四年九月一日印行
昭和十四年九月五日發行

定價一圓二十錢

著者 牧 内 武 司
飯田市大字上飯田五三三番地

發行者 山 村 正 夫
飯田市大字上飯田四五六番地

印刷者 原 田 増 藏

版 權 所 有

發行所 信州飯田市東野
電話飯田二六七番
山村書院
振替長野六二〇八番

研究社印刷

山村書院發行書目(印賣切絶版)

伊那史概要	市村 威人	一、八〇	園原・富士見台	村澤 武夫	一、八〇
伊那の傳説	岩崎 清美	一、八〇	風越山文獻と詩歌	村澤 武夫	七〇
伊那農民騷動史	小林 郊人	一、五〇	飯田のおねり祭り	今井 白鳥	四〇
一茶はうたふ	前澤 淵月	一、五〇	南伊那農村誌	竹内 利美	一、八〇
伊那歌道史	村澤 武夫	五、五〇	下伊那觀光案内	岩崎 清美	一、五〇
信州隨筆	柳田 國男	一、五〇	俳人 蛛栖 何頼	小林 郊人	二、〇〇
下伊那の特殊産業	下伊那教育會	二、五〇	信陽城主得替記	伊那史料叢書	一、〇〇
山の祭り	伊那民俗會	一、五〇	信濃宮傳浪合記	伊那史料叢書	一、〇〇
熊谷家傳記	伊那史料叢書	五、三〇	伊那神社佛閣記	伊那史料叢書	一、〇〇
近世郷土年表	今井 白鳥	一、五〇	中馬 一件文書	伊那史料叢書	一、〇〇
天龍川水防史	川路水防組合	一、三〇	茂岳 日記	伊那史料叢書	一、〇〇
			清濱 遺稿	井澤 鍊平	一、六〇

智里村誌	智里青年會	三、〇〇	江戸時代に於ける南信濃	市村 威人	一、五〇
文永寺史	下久堅小學校	一、五〇	伊那俳句集	小林 郊人	一、八〇
文化文政の頃	下平政一	一、五〇	一茶は語る	前澤 淵月	一、五〇
伊那名所志	北原 痴山	一、二〇	一茶は語る	前澤 淵月	一、五〇
伊那史叢說一	市村 威人	一、五〇	捕虫網	前澤 淵月	一、五〇
伊那史叢說二	市村 威人	一、三〇	讀書論	下伊那教育會	一、五〇
伊那史叢說三	市村 威人	一、三〇	天孫民俗の指導原理	山口 彌三郎	四〇
佐竹蓬平傳	岩崎 清美	一、五〇	數理哲學	下村 寅太郎	一、六〇
後藤三右衛門	小林 郊人	一、八〇	古代の研究	折口 信夫	一、六〇
下伊那の地誌(遠山)	下伊那教育會	一、〇〇	萬象遺稿	小林 郊人	二、〇〇
下伊那の地誌(大鹿)	下伊那教育會	一、五〇	信濃昔話集	牧内 武司	一、二〇
昔ばなし	伊那民俗會	一、八〇	山村(郷土研究)	一、二、三、四、五號	

近刊豫告

信濃民謡集

牧内武司著

信濃傳説集

牧内武司著

右二編近刊の豫定にて目下著者が張り切つて執筆中であります。信濃昔話集の姉妹編にて必ず好評を博するものと信じます、御期待下さい

992
218

